ヤースナヤ・パリャーナを訪れて

小田島　太郎

１９９４年度は特別研究休暇（サバティカル・リーヴ）を頂いて、休暇でもなければ不可能な旅行をいくつか、楽しむことができた。またこれを通して、幾人かの新しい知己を得る幸いにも恵まれた。このような体験が、これから先の人生にどうゆう意味を持つか、

それは時間が経過しなければ、私自身にも分からないことだ。

年が改まって、5度目のロシア旅行が実現した。さんざん迷った末のことだった。1月7日の深夜、正教会のクリスマス礼拝に参加した翌朝、－それは滞在1週間の最後の日であったが－　思いつくようにして、ヤースナヤ・パリャーナへと、雪のなか、車をとばして貰った。トルストイが先祖から受け継いだ広大な領地であり、彼はここで人生の大半を、そして最晩年を過ごした。私は、降ったり止んだりする雪のなかを、思いに暮れながら何時間も歩き回った。

ヤースナヤ・パリャーナは壮大で、その自然はあまりにも美しい。この自然のなかで、その美しさに抵抗するようにして、人間だけが持ちうる魂の葛藤を、死に至るまで持ち続けたトルストイを思うと、深い緊張が体内を走った。ドストエフスキーゆかりの場所はそれまでに幾度となく訪れたが、その時々に覚えた感慨とは、全く別のものだ。一体なぜなのか。美しい自然は妖しい誘惑者だ、という印象を私は、以前から捨てることが出来ない。自然の美しさは、倫理的問題のしがらみから私たちの魂を、まるで悪夢から覚めたことを喜ぶときのように、解き放ってしまう。トルストイが、圧倒するような自然の美しさに囲まれながら、人間の根元的問題を手放さなかったと言うことに、私は驚嘆した。ドストエフスキーはどうだろうか。彼は、ムイシュキンに「美は世界を救済する」と言わしめる。勿論ここでは「女性の美」を言うのであり、また背後には、正教会の賛歌が隠れているのであるが、とにかく「美が世界を救済する」のである。勿論これは巧みな作家が作品に加えて、読者を喜ばせる甘味料なのであって、ドストエフスキー自身の意見ではなかろうが、ドストエフスキーはしかしこの感覚を理解できたのである。トルストイの倫理主義とヤースナヤ・パリャーナの美しさ、この両者が相互に他を際だたせながら、私の心の鏡に鮮やかな印象を残した。

諸条件が許せばのことだが、この地を再訪するであろうという予感を、私は自分で打ち消すのに、些か困難を感じている。

（おだしま　たろう
所員、一般教育部教授）